

## 1 実践内容

本校は昨年、コミュニティスクールとしての指定を受け、地域とともにある学校づくりを推進している。校内においては、生徒の問題行動はほとんどみられず、一見、落ち着いた学校生活を送っているが、心ない言葉で簡単に人を傷つけたり、人を揶揄したりする生徒が一部にみられるため、自分の能力を最大限に発揮できずに学校生活を送っている様子がうかがえる。



このことから、生徒の規範意識向上のため、生徒主体の取組を重視した取組が効果的であると考え、生活目標を数値化し、その目標を達成するための方策を教師と生徒会で話し合い、生徒主体で取組を進めた。また、地域とともに生徒が意欲的に取り組む社会貢献活動の環境を整えた。

### (1) 生徒と教師の取組

#### ① 生活目標の数値設定

学校生活における具体的目標の数値設定を行い、生徒と教職員が一体となって目標達成に取り組む。

【9項目の生活目標を設定しているが、具体的に5項目を示す。】

内 容	取 組	数値目標
ア からかい いじめ 暴力行為	・人権強調月間の設定（10月） ・全学級「自分も仲間も大切に作る宣言」発表	生徒・保護者90%
イ 社会貢献活動	・生徒会主催の地域貢献活動の定例化（月1回） ・部活単位での地域貢献活動	生徒60% 保護者80%
ウ 服装指導	・服装についての授業 ・生徒会と服装について考える	生徒・保護者80%
エ 清掃指導	・掃除についての授業	生徒80% 保護者90%
オ 言葉遣い	・生徒会の取組 「言葉遣いについて考える週間」	生徒・保護者80%

数値目標の数値は、保護者・生徒のアンケート結果から設定したものである。

ア 『三笠中はいじめや暴力を許さない学校である。』

イ 『三笠中の生徒はボランティア活動によく参加している。』

ウ 『三笠中の生徒は中学生らしい服装をしている。』

エ 『三笠中の生徒は清掃に熱心に取り組んでいる。』

オ 『三笠中の生徒は挨拶・言葉遣いについてよくできている。』

という質問をアンケートで行った。

② 「いきいき三笠を考える会」の定例化

全校生徒が、心から楽しいといえる学校になるためにはどうすればいいのかを、生徒会本部役員と教師が、本音で話し合う場を定例化し、学校や生徒の現状、分析、取組等を協議し、全校体制で実践する。



③ 生徒会の取組の充実

朝の挨拶運動、チャイム前着席運動、リーダー研修会、地域貢献活動など

(2) 生徒会活動の充実

- ・地域の清掃活動への参加・地域行事への参画
- ・各種施設や事業等との交流



## 2 成果及び課題

生徒会本部役員や学級代表など、リーダーたちの意識や実践力の高まりは顕著であり、愛校心の高まりがみられる。しかし、一方で学校全体としての自立心や意欲の高まりはまだ不十分で、社会貢献活動も拡がりはみられるものの、意識や行動の顕著な変容がみられない。ボランティア活動は、参加した数ではなく、地域の人と出会い、話し、感じ、学ぶことを活動の軸として、生徒たちが変容し、よりよい生き方をみつける活動へと深化させた。

## 3 その他参考となる事項

奈良市立三笠中学校ホームページ

<http://www.naracity.ed.jp/jhs01/index.cfm/7,html>

## 1 実践内容

中学校における進路指導は、従来の上級学校への出口指導からキャリア教育へと変容してきたことから、進路指導主事の仕事も大きく変わってきている。従来の「情報、データを分析し、入試に向けての事務手続きをする」という役割に加えて、「キャリア教育」という1～3年生を見通した広い意味での「進路指導」の運営が必要になってきている。しかし、高校入学後、中途退学や単位制高校へ転学をしてしまう卒業生が多いのが現実である。



そこで、「主体的な進路選択」をする生徒を育て、将来を見据えた進路選択ができれば、高校入学数か月で自らの進路選択を否定し、中退してしまうことにはならないのではないだろうかと考え、職業や進路に関する体験や調査を通じて職業観を育成するために、「キャリア教育推進委員会」を発足させた。教務と各学年の総合担当で組織し、学級活動・道徳・総合的な学習の時間の年間計画を一つにまとめて、3年間を見通したキャリア教育が行えるよう計画した。

### (1) 1、2年生での取組

1、2年生では、2年生の「職場体験」を中心に据え、それに向けた取組を進めている。1年生では、夏休みに家族の職業聞き取り調査や、学級活動や道徳の時間を使っての職業調べやビデオ鑑賞を行い、「職業講演会」につなげた。「職業講演会」では、『美容業』『旅行会社』『マスコミ関係』『医療・介護』などの事業所から講師を招いている。

2年生では、国語科と連携して、礼儀や敬語、手紙の書き方の学習をしたり、『マナーアカデミー』から講師を招いて「マナー講習会」を行ったりして「職場体験」につなげた。

「職場体験」につながる様々な取組を通して、体験活動だけではなく、事前事後の取組からも、社会の中で果たす役割や自分の生き方についての考えが深まっていったと思われる。

### (2) 3年生での取組

#### ① 過去の取組

3年生では、1、2年生の取組を踏まえ、自らの進路を考える機会を多くもたせたいと考え、いくつもの取組を実施した。体験入学に参加した内容や感想を記したレポートを壁新聞やレポート集にまとめ、他の生徒の進路に向けての資料となるように活用した。しかし、体験入学は1学期に申し込む者が多いので、進路に向けての意識がまだ育っていない生徒は、どこも見学しないまま入試時期を迎えることになってしまった。

また、県内外の高等学校に依頼し、7月中旬に高校見学を行ったこともある。班ごとに高校を訪問し、校舎やクラブの見学、事前に考えた質問に答えてもらうなどし、文化祭で発表した。しかし、各高校との調整が難しいこと、生徒が希望する高等学校が必ずしも選択肢にあるわけではないことが難点だった。

#### ② 平成23年度からの「出前授業」

①の経験を踏まえ、平成23年度から県内国・公立高校の先生にゲストティーチャーとして出張授業をしていただく取組（本校では「出前授業」という）を始めた。

目的は、「高等学校の特色ある授業を体験することにより、自分の目標を明確にし、卒業までの時期を目的意識をもって学習に取り組む契機とする。」ということである。

平成23、24年度は、2学期に一条高校、奈良高専、奈良北高校、法隆寺国際高校などの先生の授業を、受けることができるようにした。事前に「中学校ではできない高校独自の授業を」と依頼していたこともあり、生徒たちにとってとても新鮮で魅力ある授業ばかりであった。

《一例》

- ・一条高校 外国語科 「食べ物を題材とした英会話」
  - ・奈良高専 機械工学科 「粉末から金属を作る」
  - ・奈良北高校 理科 「液体窒素を使った実験」
- 《生徒の感想》

・今日、初めて金属製品を作った。今まで、「金属製品は工場でしか作れないものだ」と思っていたので、日ごろ使っている理科室で金属ができることに非常に驚いた。高専へ行ってもっといろんなことを知りたいなと思った。

今年度は、高校進学への意識を高め、積極的に体験入学やオープンキャンパスに参加する生徒を育て、夏休み以降の学習や進路選択に役立てたいというねらいで、1学期（7月中旬）に実施した。

今年度実施したのは以下の高校及び内容である。



	学校名	教科	内 容
1	奈良高専	理科	「音をみよう！」
2	奈良北	理科	「物質の状態変化」
3	奈良北	英語	「ALT先生とともに高校1年の英語の授業を体験しよう」
4	生駒	数学	模擬授業
5	添上	体育	「ダンス」
6	奈良朱雀	商業	「簿記入門」 基礎的な簿記を体験する
7	法隆寺国際	歴史	「地域から世界を学ぶー法隆寺の謎を問うー」
8	高円	美術	①美術について ②学校紹介
9	榛生昇陽	福祉	①福祉科で学ぶこと ②生活支援技術の授業
10	王寺工業	技術	「LEDを使ったキーホルダーの制作」

## 2 成果及び課題

3年間実施した「出前授業」であるが、生徒は、中学校とは違う実験や授業の展開に目を輝かせていた。特に、実業科などの普通科以外の授業は、とても専門的で、漠然と考えていた進路を具体的に考えるきっかけになったように思う。今年度は7月に実施したが、生徒の進路選択への意識を高める観点、年間スケジュールからも最適であった。

しかし、準備を含め高等学校の先生方に負担をおかけしてしまう点、理科室やPC室など設備をもつ教室に限られている点など課題も多い。

## 3 その他参考となる事項

緑ヶ丘中学校ホームページ <http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/school/midori-j/>

## 1 実践内容

### (1) はじめに

前任校で12年間、本校で1年間、体育主任として体力向上の推進に取り組んでいる。今日、体を動かす機会が減少し、生徒の体力低下が問題となっている。また、運動に興味をもたない子どもも増えている。そのような中で、生徒の体力向上を図るためには、学校での週3時間の体育学習の在り方がますます重要になっている。



### (2) 生徒の実態について

本校は、3年前より「魅力ある体育活動づくり計画」に基づき、体力向上の取組を着実に進めてきた。昨年はA判定者が19名であったが、今年は41名に増えたことは大きな成果であると考えている。しかし、テストの項目別に詳しく見ると、どの学年においても上体おこし、反復横跳びは県平均を上回っているが、立ち幅跳びにおいては全学年とも県平均を下回っていることが分かった。

### (3) 体力向上の取組について

前任校では、体育の授業の初めに1kmのランニングと5分間のサーキットトレーニングを行っていた。生徒に体力向上のために行うことを最初に説明したが、生徒が意欲的に取り組むようになるまでには3年かかった。本校では25年も前から同じ取組を行い、体力向上に努めてきた。

本年度は、県教委の体力向上プロジェクトモデル校となり、2年生男子において、5月から持久走と立ち幅跳びの2種目に絞って、プロジェクトを開始した。

具体的には、これまでからも毎時間取り組んでいる600mのランニングとサーキットトレーニングのタイムをノートに記入させ、生徒にタイムの短縮を目標にして取り組むよう指導した。また、立ち幅跳びの記録を伸ばすために、サーキットトレーニングの内容を工夫し、「5段跳び」等の種目を入れた。

## 体育館でのサーキットトレーニング

- 1 ランニング (5周)
  - 2 腕立て伏が腕屈伸 (15回)
  - 3 仰が上体おこし (20回)
  - 4 伏が全身そらし (20回)
  - 5 パービー・ジャンプ (10回)
  - 6 支持倒立 (壁タッチ) (5回)
  - 7 スクワット・スラスト (20回)
- ※ 7番の種目を「5段跳び」に変更



## グラウンドでのサーキットトレーニング

- 1 ランニング3周 (600m)
- 2 仰が上体おこし (20回)
- 3 伏が全身そらし (20回)
- 4 バウンディング (20m)
- 5 逆上がり (鉄棒使用) (5回)
- 6 もも上げジャンプ (10回)
- 7 手押し車 (25m)
- 8 スプリンター (20回)
- 9 50mダッシュ

※ 8番の種目を「5段跳び」に変更



## 2 成果及び課題

体力向上の課題は、生徒がいかに意欲的に活動に取り組むかということであり、これは、前任校でも同様であった。

そこで、授業に一番早く来た生徒や、ランニングやサーキットトレーニングに積極的に取り組んでいる生徒を賞賛したり、全体の場で認めたりすることにより、生徒の意欲（モチベーション）を高めることに努めた。すると、真剣に取り組む生徒がだんだんと増え、今では、ほとんどの生徒が意欲的に取り組んでいる。また、2年生男子においては、立ち幅跳びを5月、6月、7月と1か月毎に計3回測定し、持久走も2回測定した。その結果、両種目とも、記録が向上した。

中学校体力向上支援事業 体力データのまとめ (2年男子)			
持久走 (1500m)	5月9日	390.4秒	・平均で20秒近く速くなっている。
	6月25日	371.4秒	
立ち幅跳び	5月9日	183.2cm	・平均で5月から6月は7.7cm、6月から7月は2.9cm程度のびている。
	6月25日	190.9cm	
	7月10日	193.8cm	

今後は、生徒自身が運動の内容を選択したり、自己目標を設定して取り組んだりするなど、生徒自身の内発的な動機付けにより意欲を向上させるような取組に発展させることを目指したい。そのためにも、今年1年間の成果を検証するとともに、今後も継続した取組として発展させていきたい。

1 実践内容

体操競技といえば、オリンピックでも活躍している華やかなスポーツではあるが、中学校の部活動ではマイナーなスポーツの一つである。入部してくる生徒のほとんどは経験のない初心者であり、高校進学後も県内では体操部が少なく、やむを得ず他の部活動を選択する生徒も多い。そこで、他の競技でも生かせるように、運動に取り組む姿勢やトレーニング方法などを考察し、自分で考えながら活動できるような生徒の育成を目指すこととした。



(1) 練習計画の作成

できるだけ綿密な練習計画を作成し、体操部の目標や練習の目的を明確にすることで、技の習得や習熟スケジュールを考えながら練習できるようにした。

① 年間計画について

1年間を総体期・新人大会期・トレーニング期の3つに分け、それぞれの時期に目指すべき課題をあげ、個人の目標を考えさせた。総体期は4～8月で、演技の習熟を目指す期間、新人大会期は8月下旬～11月で、新人大会に向けての練習期間、そして、トレーニング期は11月～3月で、基礎体力の充実と技の習得をする期間とした。新入生については、4月から新人大会へ向けて、基礎技術の習得を目標に取り組みさせた。

② 月別計画について

練習日、約2週に一度の休養日、練習強度・練習時間を入れた計画を作成、それを提示し、欄外にはその月の目標（生活面・部活動面）を入れ、月末に配布した。練習強度は次の4段階で行った。

- D練習＝休日の練習（4時間程度）
- C練習＝平日の練習（2～3時間）
- B練習＝平日の練習（1時間程度）
- A練習＝休養日

平日の練習については、3つの競技種目のうち、1日1、2種目を組み合わせ、40～50分単位でローテーションをしながら練習できるようにした。休日は、半日練習を基本に全種目を練習できるように計画した。1種目の練習内容は、できるだけ試合に近い形でできるように、30秒アップの後、演技を最初から最後まで続ける続行練習を1、2回行い、残りの時間を個々の技の修正練習を基本とした。また、練習が単調にならないように、倒立静止競争、着ピタ（着地で動かない）など、ゲーム感覚の競い合いも時折入れながら行った。

**6月練習計画**

八木中学校体操部

日	日	時	行事	練習内容	時間	練習強度
1	月	3:30				C
2	火	4:00				C
3	水	3:30				C
4	木	4:00				C
5	金	3:30				C
6	土	1:00				D
7	日	8:30				D
8	月	3:30				C
9	火	4:00				C
10	水	3:30				C
11	木	4:00				C
12	金	3:30				C
13	土	8:30				C
14	日					
15	月			休養日		
16	火	3:30				C
17	水	4:00				C
18	木	3:30				C
19	金	4:00				C
20	土	3:30				C
21	日	8:30				D
22	月					
23	火		1年合宿訓練			
24	水					
25	木					
26	金					
27	土					
28	日					
29	月					
30	火					
1	水					
2	木					
3	金					
4	土					

【目標】基礎技ができるようになる。

1. 基礎体力をつけよう。  
(柔軟・脚力・筋力を身につけよう)
2. 美しい演技を心がけよう。
3. 練習時間に遅れない。

注意

1. 練習日、練習時間が変更することもあります。
2. 欠席連絡を必ずすること。

【トレーニング計画】

- ①run3周 前庭200
- ②ダッシュ3 もも上げ3 片足跳び2 (30m)
- ③ハンドバウンド10×3 ジャンプ10×3 抱え込みジャンプ5×3
- ④腹筋・背筋・腕立て10×3
- ⑤懸垂立 15秒
- ⑥柔軟 前後(開脚・閉脚) 左右開脚 前後開脚 肩 フリッジ

練習の日は、

- ①～③は朝
- ④腹筋・背筋・腕立て10×5
- ⑤懸垂立 300秒
- ⑥柔軟

7月5日 種別体育館 10:00集合  
弁当・水筒

## (2) 演技構成表と習熟度表の作成

個人の演技づくりへの意識付けと演技のできあがり状況を理解し、客観的に自分の演技を確認できるようにした。

### ① 演技構成表について

要求される技を入れながら自分の演技を考えさせた。技の減点も考慮して目標とする得点を挙げさせた。

### ② 習熟度表について

生徒とともに技の習熟度を確認し合い、それまでの練習を振り返り、達成できていない原因を考えさせた。また、次の段階のめあてを決めた。

## (3) トレーニングについて

体操競技で特に必要な瞬発力や柔軟性を高める運動を練習前の30分間、準備運動に取り入れた。また、個人的に体力面の弱いところを練習後の補強運動で補った。

## (4) ミーティングについて

定期的にミーティングを行い、練習計画・習熟度・トレーニングの意義や目的について、粘り強く話し合い、自ら気付かせるようにした。

## (5) 保護者会について

保護者の協力がなければ部活動は成り立たない。年間数回の保護者会を開き、部活動指導者の意図と保護者の意見のすり合わせをし、お互いの理解を深めながら子どもの課題を解決するための方向性を確認し合った。

ゆか										
種目	E	D	C	B	A	難度	特別	加減	実施	
										6
1	ロンダード～後転跳び～後方伸身宙返り1回ひねり					B	II		0.2	
2	前転跳び～前方伸身宙返り					B	I		0.1	
3	前後開脚座					A	V		0.1	
4	正面支持臥～伸腕屈身力倒立					B	IV		0.2	
5	前方宙返り連続					B+B			0.1	
6	正面片足平均立ち					A	III		0	
7	ロンダード～後転跳び～後方伸身宙返り					B			0.1	
8										
9										
10										
11										
12										
特別要求									設定得点	
I	前方系の跳躍技						A		8.7	
II	後方系の跳躍技						A			
III	片脚上でのバランス技(2秒静止)						A			
IV	倒立静止(2秒静止)						A			
V	柔軟性を表現する技						A			

## 2 成果及び課題

学年が上がるにつれて生徒の意識も向上し、活動にも自主的・積極的に練習参加するようになった。また、上級生が自身の過去と下級生の状態を重ね合わせ、親身に指導をする場面もみられるようになった。戦績としては、平成4年から平成21年までの18年間連続近畿大会出場、県総体男子団体優勝10回、女子団体優勝4回とそれなりの実績をあげることができた。また、卒業後も体操競技を学び、高校、大学の体操指導者、民間のジュニア指導者への道を歩んでいる生徒たちもいる。

社会人になってからも学年を越えて集まり、楽しみながら練習会をする卒業生の姿から、試合は一人で演技台に立たなければならないが、練習は仲間がいるからこそできるのであり、つながりを大切にすることの重要性も伝えることができたのではないかと考える。

現任校へ赴任するまでに若い指導者へ指導方法を継ぐことができなかったという反省はあるが、現在まで蓄積した経験を、体操競技以外の部活動においても活用できるような方策を考えていきたい。



## 分野番号 6 中学校 学校教育目標の具体化の部

### 生徒の判断力を向上させ、自ら行動できる防災教育 ～ 生き抜いて、助けられる人から助ける人へ ～

五條市立五條中学校 教諭 尾崎 和弘

#### 1 はじめに

平成23年3月11日、東北地方を中心に襲った東日本大震災や、同年9月の私たち五條市における、豪雨による未曾有の水害により、多くの命が犠牲となった。自然災害の恐ろしさを改めて実感させられるとともに、防災教育の重要性を強く再認識させられた。



本校では、大地震発生の際に適切な行動のとれる生徒の育成を目指し、日ごろの危機管理意識を高め、自らの命を守る判断力と行動力を向上させる取組を行った。また、災害時には本校が避難所に指定されており、過去の被災地の教訓を基に、教職員が避難所において果たせる役割を想定し、地域・家庭との連携を図った避難所運営について研修を深めた。

#### 2 実践内容

##### (1) 保護者との連携と職員研修

###### ① 保護者への理解と協力を求めて

災害発生時の生徒引き渡しについての体制を見直し、「生徒引き渡しカード」の作成を行い、保護者の協力・理解の下にカードの共有を図った。また、各家庭に長期休業期間を利用して、「家族防災会議」を三者面談等で進め、その際の資料提供を行った。

###### ② 避難訓練の在り方

より切実感をもって訓練に取り組むために、1：数値目標を掲げる 2：予告なく突発的な事象への対応ができる 3：「お・か・し・も」（押さない・かけない・しゃべらない・もどらない）を合い言葉にして、災害時に控えるべき行動の具体的な事例を資料提示する、の3点を点検・実施した。

###### ③ 職員研修における災害図上訓練の実施

和歌山大学防災研究教育センター客員教授の今西武先生を講師に招き、教職員を対象に災害図上訓練（避難所編）を実施した。教職員が避難所で果たせる役割をシミュレーションを交えて討議し合った。



写真：災害図上訓練の様子

##### (2) 特別活動における取組

###### ① 調べ学習（地震体験聞き取り調査と危険箇所現地調査）

夏休みを利用して、生徒の目から見た登下校時の通学路における危険箇所の調査と、過去の大地震の様子や先人の災害経験を聞き取り調査する課題を出した。

###### ② 体育大会における学年種目

2学年教師集団と各学級代表が話し合い、「レスキュー80」と称したリレー種目を考案した。竹竿2本とレジャーシート1枚で、簡易担架を容易につくることができた。

③ 分団会ごとによる地震の際の危険箇所報告会

調べ学習で収集した危険箇所情報を分団会ごとに集約・吟味させ、パワーポイントで地図・写真等の資料を提示し、注意点や改善点を提案させた。生徒間の危機意識の共有を図り、より安全な登下校の実現を目指した。

(3) 防災教育宿泊訓練の実施

① 避難所の開設

すべてのライフラインが寸断されたことを想定して、地域の方々や保護者とともに本校校舎を利用した1泊2日の避難所生活を体験した。

② 段ボールパーティション(間仕切り)体験

実際に教室を避難所に見立て、一辺120cm近くある段ボールとクリップを利用して、間仕切りをした。1教室を4分割し、1班(4~5名)の部屋を4つ作る作業をした。

③ 給水支援

五條市水道局より、給水ポンプ車による給水支援をいただいた。簡易タンクに飲料水が給水され、4つの蛇口に連結することで、スムーズな給水が得られた。

④ 野外炊飯

食事については、湯を沸かすだけでできる物を必要最小限にすることを心がけた。

⑤ ダーク&ライト体験活動

光のない不便さを体感するだけでなく、真っ暗闇の状態で行動する際、どんな小さな光でも存在すれば、不安を和らげ安全かつ迅速な行動がとれることを実感した。

⑥ AED研修

「助けられる人から助ける人へ」を直接実行する活動として、生徒たちは真剣に取り組んだ。人命救助を行う上で、恥ずかしさや照れは妨げとなり、命の危機に直面した際、「とにかく勇気をもって、精一杯取り組むこと」の大切さを救命救急士から教えられた。



写真：宿泊訓練中のAED研修の様子

3 成果と課題

生徒の危機管理意識を向上させるには、継続した防災教育が必要である。また、教職員にとって切実な課題は、学校が避難所になった場合のノウハウをほとんどの教職員が知らなかったことである。その中で災害図上訓練の実施は、実践的なシミュレーションに基づき、私たち教職員が災害時に果たせる力量を高めるものとなった。

また、課題の1つ目は、災害に対する危機意識は大地震だけに限定せず、自然災害から身を守るためには、危機管理と関連する防災気象情報を的確に読み取って、自分で危険を予測し、判断できる大人へと成長させなければならないということである。2つ目は、防災教育を本当に意味あるものにするために、自治体との協力体制を密接に図ることである。3つ目は、「学校は地域と一緒に学んで学ぶこと」が重要であり、災害時に役立つ実践的な防災教育を行うためには、地域との連携が欠かせないということであり、そのためにも地域のことをよく知り、地域との関係を日ごろから保っておくことが重要となる。今後、学校が地域とのパートナーシップを図る上で、大いに防災教育を活用していきたい。

## 1 実践内容

### (1) 教育課程の取組

平成16年度より指定を受けたスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）事業の担当者として、近隣の京都大学、大阪大学、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学などと生徒を対象とした高度な課題研究や講演、あるいは教員研修を軸とした高大連携講座を推進した。

平成24年度より、第3期のSSH事業の推進に伴い、1年生のスーパーサイエンスプロジェクト（以下、SSP）科目「地域・生活の科学」では奈良に関する探究活動を中心とした学習を行い、生徒によるポスター発表の場を設け、「奈良TIME」への更なる内容の発展を推進している。「情報」と「総合的な学習の時間」を統合した「SSP基礎」を3単位、1学年時に必履修として実施し、基礎的な科学の学習を通して科学への興味・関心を高め、自分の考えや研究内容を文章にまとめ発表する力や情報機器の活用能力を育てている。このうち1単位を「地域・生活の科学」として、平成24年度から奈良に因んだ内容を探究し学習する「奈良TIME」に充当している。具体的には「奈良の大仏を科学する」「大和野菜についての研究」「奈良を英語で紹介する」「大和の民話の調査」等、1年生が20以上のグループに分かれて1年間研究を行い、校内の発表会でポスター発表を行っている。さらに、2、3学年では、生徒は学校設定教科「SSP発展A・B」の2単位の各科目（「SSP奈良A・B」「SSP数学A・B」「SSP理科」「SSP物理」「SSP化学」「SSP生物」「SSP地学」「SSP科学英語A・B」「SSP表現A・B」）を自主的に選択し、探究活動や研究活動を行っている。



### (2) 課外活動の取組

課外活動の場として、平成19年度より第2期の事業の推進に伴い、ロボット研究会や数学研究会を創設した。

ロボット研究会ではWRO、SRC、ロボカップの世界大会を目標に部員とともに取り組み、平成21年度より全国大会に出場、さらには、平成23年度ロボカップ世界大会（イスタンブール大会）では第4位に入賞することができた。また、物理部では物理チャレンジ、パソコン甲子園、缶サット甲子園にも挑戦しており、全国大会への進出の実績を生かして、その活動をより推進している。



ロボカップ世界大会

### (3) 地域との連携活動

校外では、平成11年度の「青少年のための科学の祭典」奈良大会の設立当初から、実行委員として活動が続けている。また、奈良県高等学校理化学会常任委員、「きっ

づ光科学館」の実験工作開発メンバー、「けいはんな科学のまちのこどもたちプロジェクト」のワーキングメンバーとして出前実験教室等、科学に対する地域の児童や生徒への啓蒙活動をボランティアで行っている。さらに、平成21年度「第1回教員南極派遣プログラム」に参加させていただいた体験を県内の小・中・高校等で講演させていただいている。

なお、平成24年度に「地域の中核拠点形成」としてコアSSH事業を立ち上げ、地域の小・中・高校計15校を連携校として、サイエンスフェスティバルやロボット講習会を実施した。現在取り組んでいる第3期SSH事業では、前年度のコアSSH事業の連携を県内の小・中・高校の計22校に拡大し、大学や研究機関に協力を得ながら、ともに科学を学び合う「寧楽（なら）SSネット」を創設し、奈良県の理数科教育の普及活動に取り組んでいる。

## 2 成果及び課題

SSH事業の導入により、以上のような取組やCSSNプログラムでの米国のUCLAやNASA（JPL）、アジアサイエンスキャンプ、内閣総理大臣オーストラリア科学奨学生制度へ生徒を派遣し、海外へ目を向けた国際的な人材の育成に貢献できた。

生徒の課題研究に関しては、研究内容をより深化させ、一定の成果を上げつつ、研究の成果は校内や県内では積極的に発表している。しかし、全国的なレベルでの発表や各種オリンピックの予選への応募は増加しつつも、国際的なレベルに挑戦できるものはまだまだ少ない。このことは改善すべき課題である。さらには、本校教員のアンケート結果では、まだ学校全体で取り組めていないとの指摘もある。以上のような課題に対しては、更に全教職員の連携に力を入れて取り組むことを目標としつつ、県内の連携校とともに長期的な奈良県の理数系人材の育成も視野に入れて、科学コンテストやものづくりコンテスト、科学フォーラムを継続的に実施していくことを検討している。



サイエンスフェスティバルの様子

## 3 その他参考となる事項

奈良県立奈良高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/nara-hs/>

## 分野番号2 高等学校 生徒指導の部

### 大規模校としての学校、生徒の実態に即した生徒指導について

奈良県立平城高等学校 教諭 山口 浩

#### 1 実践内容

本校は、奈良市最北部の平城ニュータウンの中に昭和55年に開設され、学年10クラス、全校生徒1,196名と県内有数の大規模校である。また、生徒は県内全域から通学しており、出身中学校数は90を超える。大学等への進学率が99%であり、従来、生徒一人一人の学校への帰属意識や、責任感が希薄であった。このような平城高校生としての一体感に欠ける雰囲気の中、遅刻の常習化、茶髪や服装、言葉遣いの乱れなど規範意識の乏しい生徒が目立ち、地域の方からも通学マナーの悪さを指摘する声が多く寄せられていた。



生徒指導面においては、学年ごとに指導の内容や方法が異なり、学校としての意思統一が不十分であった。上記の課題を受けて4年前に生徒指導部長を拝命し、まず現状を変える取組として、各学年主任との毎月2回の話し合いの場をもった。平城高校の目指す学校像や生徒像を確認し、全教員の共通理解を図った。

毎日、登校指導を行い、一人でも多くの生徒の朝の表情を見るために生徒と笑顔であいさつを交わし、全校生徒とかかわることを目指した。日々9割以上の生徒とのかかわり、状況把握をし、1日をスタートしている。その中で、服装、頭髪などの指導を要する生徒に対しては、学年、クラス、名前を確認し、その生徒の個の自覚や責任感を高める指導を会話で行い、生徒の名前を覚えることでその生徒との以後の指導、かかわりに繋げている。9割以上の生徒の名前を覚え、コミュニケーションを重ねていく中で平城高校生としての自覚と責任感を促すとともに、各学年主任と毎日連携（報告・連絡）し、全教員が徹底した同じベクトルで日々の生徒指導を行っている。

目指す生徒像： 「自由な中に規律があり、品格を感じさせる学校」  
「主体的に学 び続ける生徒の育成」

##### (1) 服装（身だしなみ）指導

服装については、「平城高校生としての誇りをもって、品格のある制服の着こなし」をモットーに全校集会、各学年集会で意識を高めさせ、また、毎日の登校指導やホームルームで点検を行い、授業開始時には身だしなみを整えた上で学習活動に専念できるように指導している。「品格の向上」を基本として、全教員の徹底した指導により、その中から平城高校生としての制服を正しく着ることの大切さを自覚し、責任が芽生えることにより、生徒一人一人が本校の制服に誇りをもって品格のある着こなしができている。

##### (2) 登校指導と遅刻指導

通学路混雑の緩和や遅刻防止の観点から学年別時差登校を実施し、1年生は8時5分、2年生は8時15分、3年生は8時25分までに登校するように奨励している。

生徒たちもその意義をよく理解し、各学年97%の生徒が実践し、早く来た時間を予習・復習、読書の時間に当てるなど、ゆとりをもって学習活動に取り組んでいる。

また、通学路や校門前で担当教員7名が毎日登校指導に当たり、通学マナーや服装、頭髪指導をしているが、それは登校時の生徒の様子や友人関係などを知る上でも大切な取組となっている。その指導を通して生徒の名前を覚え、コミュニケーションを重ねていく中で、生徒の平城高校生としての自覚や責任感が高まるように努めている。

この取組を通して、4年前は1年間の遅刻総数が3,015回（そのうち寝坊の遅刻は1,329回）であったが、昨年度は1年間の遅刻総数が1,561回（そのうち寝坊の遅刻は511回）に半減した。

### (3) あいさつ、言葉遣いの指導

あいさつについては、毎日の登校指導や様々な機会を捉えて、教員から積極的に声をかけるようにし、その際に言葉遣いについても指導するように心がけている。一人一人と目を合わすことで、すべての生徒が元気で明るく気持ちよいあいさつができるようになった。

### (4) 生徒指導と部活動

現在、85%の生徒が部活動に所属し活動している。クラブ員集会を実施し、クラブ員が学校生活の様々な場面で積極的、先導的な役割を果たすように指導している。また、クラブ員としての自覚や学校生活の中での位置付け、「文武一貫」を念頭に置いた心構え等、あるべき姿に関して共通理解、意思統一させる指導もしている。

学校生活において、服装やあいさつ、言葉遣いなど礼儀正しく爽やかでけじめのある行動『平城スタイル』を確立してくれている。

学校生活等意識調査(全校生徒対象)集計結果より	H21年度 → H25年度	
・生徒との信頼関係に基づいた生徒指導が行われている	「思う」 52.4%	63.3%
・服装や頭髪等の指導が適切に行われている	「思う」 73.8%	86.1%
・マナーや言葉遣いに関する指導が適切に行われている	「思う」 72.5%	87.4%
・校則を守っている生徒が多い	「思う」 71.8%	86.8%

## 2 成果及び課題

生徒指導の理念を全教員に対して明確に示し、教員が個々の生徒の状況をよく把握し、温かく細やかにかかわっていくことで信頼関係がより強まっている。そこから全校生徒が自分たちでよき校風、伝統を築いていくという意識が浸透し、学校や組織の一員としての自覚をもち責任ある行動がとれるようになってきた。これまでの取組の成果が出てきており、「大きな声で爽やかにあいさつできる生徒」「服装や頭髪などを高校生らしく」「ルールやマナーの遵守」「遅刻の防止などの時間を守る生徒」「文武一貫の実践」などの『平城スタイル』を身に付け、品格を感じさせる生徒が数多く育っており、保護者や地域の方々からも高い評価を得ている。高校生を取り巻く社会環境が激変している現在、今後更に生徒が主体的に考え判断し行動できるよう、そして規範意識をもって有意義な高校生活を送り、将来社会を担っていくという自覚を身に付けた生徒を育てられるよう一層意欲的に取り組みたいと考えている。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立平城高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/hei-jo-hs>

## 1 実践内容

学習指導要領の改訂・「奈良T I M E」の導入をきっかけとして、学力の向上・主体的に学ぶ力の育成・進路の実現をテーマに新しい事業を展開したいと考えた。そのためには、目的意識の明確な学習意欲の向上が必要となるが、単に学力向上を目指すのではなく、社会人基礎力の要素である「行動する力・考える力・チームで働く力」を育てることにより、目的は達成されると信じ、以下の事業を企画・実践した。



### (1) 高大連携事業を取り入れた奈良T I M E「倭（やまと）」の企画・実践

奈良T I M E「倭」の企画を担当し、平成24年度から各学年1単位で先行実施した。

1年次は、第1部とし、大学の一般教養をイメージして計画した。具体的には幅広く奈良を再認識するため、1学期に奈良を題材にした壁新聞を制作。2学期は、奈良の産業、環境、文化遺産の3分野の授業を行い、3学期には、県内の大学より留学生8人を招いて、お互いの文化・習慣について話し合う場を設けた。2年次は、第2部とし、大学の専門教養をイメージして、大学の学びを体感しながら、奈良の経済、観光、公共政策、社会学、環境、健康・教育の6分野から1つを生徒に選択させ、自ら設定したテーマに取り組む課題研究とした。内容は、提携する6大学の教員による年3回ずつの講義及びプレゼンテーションと、観光客や地域住民への街頭インタビュー、企業・県庁への聞き取り調査などのフィールドワーク等を含んでおり、大学や企業、県庁との連絡・調整に当たった。年度末にはプレゼンテーション会を開き、生徒が相互評価をすることになっている。

3年次では、1部・2部の成果を踏まえ、自己実現・進路実現のため、「倭」で培ったコミュニケーション力、思考力、表現力などを駆使し、小論文作成、面接演習等に取り組むこととした。

この取組は、生徒が奈良の課題を再認識するだけでなく、コミュニケーション力の向上と、的確な進路選択をする力を育成し、更に生涯にわたって学習意欲をもち続けることも意図している。

### (2) フレッシュマンミーティングの開催

入学予定者に対して、在校生が主体となった入学前オリエンテーションを企画し、実施した。3学期当初に在校生から希望者を募り、25名を選抜してコンダクターとして任命し、高校で学ぶ意義、社会人に向けて必要とされる力、礼儀作法などについて、2か月にわたる研修を実施した。入学式前の物品購入日に実施し、入学予定者のほぼ半数、約120名の参加を得て、様々な不安を抱える入学予定者の環境適応と、高校での学習への動機付けの一助となった。



この取組は、新入生の高校生活への適応をスムーズにするだけでなく、コンダクターとして活躍した在校生自身が、より愛校心を深め、学習意欲やコミュニケーション

力を高めるのに効果があり、それが学校全体に派生する効果も見受けられた。

### (3) 地域の中学生・保護者に対するキャリア講演会の実施

昨年度と今年度の2年間、地元中学校の4校より、進路講演会の講師として招聘され、キャリア教育の視点から、中学3年生とその保護者を対象に、学ぶ意義・高校生活・大学入試・就職に向けて必要とされる力など、将来に向けた意識啓発のための講演を行った。また、毎年7月には、帝塚山大学学園前キャンパスを借りて同様の進学ガイダンスを開催し、100～120名の参加を得ている。参加者からは、「単なる高校の説明会とは違う、視野の広い進路学習ができた」という評価を多くいただいている。

### (4) 資格・検定取得の取組

自主的に学ぶ姿勢と客観的な学力を身に付けるため、主に1・2年生を対象に語彙読解力検定・GTECを導入した。受検対策は、朝の学習時間（15分間）を利用して行った。受検は任意としたが、校内のムードづくりに努め、98%の受検率に至った。実際にこれらの実績を進路決定の際に役立てた生徒もいる。

### (5) ボケーションナルガイダンスの実施

職種は違っても、社会人として必要な素養が同じであることを知らせるとともに、今から身に付けておかなければならない力とは何かを生徒に理解させることを目的として、自らコーディネーターとなり、社会人講師をパネラーにディスカッションを行った。生徒・教員ともに、新鮮な気持ちで聞くことができたと好評であった。



### (6) 入学前教育プログラムの実施

大学進学希望者のうち、指定校推薦等で早期に進路決定した生徒を対象に、入学前教育プログラムを実施した。これは一般入試対策とは違った形で、大学進学に向けた積極的な学習態度と知識の向上を目指すものである。内容は、大学の履修や授業の様子を大学生を交えてのガイダンスを行ったり、大学の授業を想定した課題研究などに取り組み、プレゼンテーションを実施するものである。

## 2 成果及び課題

郷土を知り、郷土を愛し、グローバルな視点で郷土のよさを発信できる人材を育成することを目標とするだけでなく、社会人基礎力の育成を意識して、奈良TIME「倭」の実施計画を立て、スムーズな滑り出しに貢献できたことが成果としてあげられる。また、本校生のみならず、入学前生徒、中学生、保護者にもキャリア育成の視点からの進路についての考え方を説く場を設定してきたが、参加者からは、高い評価をいただいている。課題としては、大学をはじめとする各団体・社会人講師招聘のための企業との交渉と調整に手間と時間がかかることや、継続的により充実した内容にするための後継者の育成と、今後の成果の検証が必要であると考えている。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立登美ヶ丘高等学校ホームページ <http://www.tomigaoka-hs.jp/>